# 抱擁

## タンゴの弟子



ウォルター・リベラ・サントス

# 抱擁

タンゴの弟子

ウォルター・リベラ・サントス

# 序

一人の講師。ともに稽古し、踊れる相手。めったにない均衡を保てる人。決意と、やわらかさと、一歩も譲らないだけの確かな芯。

まず彼女の存在が届き、次にメッセージが、それから三十秒の動画が届いた。ささやきのように軽い二本の指が生徒たちの肩に触れ、そのひと触れだけで、体の正直な線をまるごとまっすぐにしていた。人は師を選ぶのではない。探求が十分に熟したとき、それと気づくのだ。共通点の少ない二つの人生。それが、ここで出会う。

# 方法についての覚え書き

本書は、アルゼンチン・タンゴの修業を綴った回想録である。すべてはひとつの啓示から始まった。二〇二五年五月、プエルトリコでカヤックを漕ぎながら、ヒューバーマンのポッドキャストを聴いていたときのことだ。サンファンがその火花をあおり、熟させ、やがて私はブエノスアイレスへ、カロリーナ・ボナベントゥーラが営むダンススクール兼ホテル、マリポシータ・デ・サン・テルモへとたどり着いた。そこで私は、稽古と芸術的な探求にすべてを捧げた。

集中三か月、プライベートレッスン四十回の契約を携えて到着し、担当になったのがマリア・〝メアリー〟・イサベル・レスカーノだった。彼女は、私がそれを名指せるより先に、何かが私を押しとどめていることを察した。マテを挟み、レッスンのあとで問いを重ねるうちに、彼女はサンファンでの私の一年を明るみに出していった。踊った床と、友人たちと、ついに私を選ばなかった恋を。それらの話は、彼女が引き出した順番どおりにここに現れる。

会話は記憶をもとに再構成し、ときには、私がその場にいなかった瞬間を生きた人たちの証言にも拠った。私の師たち、カロリーナ・〝カロ〟・ボナベントゥーラ、マリア・〝メアリー〟・イサベル・レスカーノ、レオナルド・〝レオ〟・コルドバに、心からの感謝を捧げる。彼らの芸術と寛大さと精神が、この変容を可能にしてくれた。

# 第一部
## 種

二〇二五年 ― カボ・ロホとサンフアン

# タンゴの種

二〇二五年五月二十四日（土）― ボケロン州立森林、カボ・ロホ

ふだんは見張りのいるカボ・ロホ国立野生生物保護区のゲートが、早朝の靄のなか、半ば開いたまま、誰もいなかった。

左手では、ホユダ潟の潮の息づかいのなかを、鳥たちが水面をかすめていた。桟橋を見つけ、コンクリートが砂利に変わり、背後に岸の縁が見えるところまで、バンをバックさせた。

胸には富士フイルムのカメラが下がっていた。潟に漕ぎ出すと、最初のひと掻きが音もなく水を切った。ひらけた空と自然の音に囲まれたそこは、私をユートピアめいた考えへと押しやる種類の場所だった。

白いサギが一羽、マングローブの根の上に立っていた。緑に対する反論のように白かった。さらに二羽が飛び立った。まなざしに問われた女が、はいと決めて立ち上がるように。私はカメラを構えた。シャッターが鋭く鳴った。

イヤホンをつけ、ポッドキャストを流していた。スタンフォードの神経科学者がドーパミンについて語っていた。衝動はけっして「持つこと」にあるのではなく、「探しにいくこと」にあるのだと。そこで、あの一節が来た。『最近、父と話したんです。父はアルゼンチン人なんですが、昔あそこでは本物の会話をしていたものだ、と自慢していました』

アルゼンチン。そして、招かれもせずに――本物の客がいつもそうやって来るように――タンゴが来た。マングローブは身を傾け、その根は指のように絡み合っていた。艇体の下で、魚が銀色にきらめいた。私はゆっくりと漕いだ。かつてライフルを担ぎ、のちにカメラを担いだ肩で。いつの日か、抱擁に身をゆだねることを覚えるはずの肩で。

まだ何もなかった。二二×一四×九インチに裁たれた革のバッグも、土曜の時計に追われながら工房を閉めることになるポンセの引退した職人も、南へ六千キロ離れたところから返事をくれることになる、カロリーナという名の赤い蝶も。カルロス・カルボ九五〇番地も、まだ何もなかった。

ひと掻きと次のひと掻きのあいだに、ひとつの考えが決意に変わった。では、アルゼンチンだ。見つけるべきアサードがあり、そしてタンゴがある。タンゴは譲れなかった。そして、タンゴをやるのなら、自分の島にも、立ち方を学ぶための床が要る。

使い込まれたボートが一艘、マングローブのあいだから出てきた。漕いでいるのは女性で、その手のなかで何か金属が光っていた。

「オラ！　これ、桟橋に置き忘れてましたよ」

私のバンの鍵だった。フォームの浮きに結わえてある。彼女がのんびりとした弧を描いて放り、私は空中でつかんだ。

それが二〇二五年五月のことだ。潟と、どの飛行機とのあいだにも、まるまる一年があった。島の一年が。私はサンフアンに床を探し、カボ・ロホからコト・ラウレルへ移り、週に三晩、四晩と五二号線を走

り、十二月にようやくサンフアンへ越して、住まいと踊る床とを近づけることになる。

バッグも、空港も、海も、すべては十三か月後、二〇二六年六月のことだ。だが、その一年そのものと、それがどう私を作り直したかは、ひとつのやり方でしか語れなかった。サン・テルモで、冬に、マリア・〝メアリー〟・イサベル・レスカーノの稽古の抱擁のなかで。

# 体をタンゴに溶かす

二〇二五年五月二十六日（月）— アーサー・マレー・ダンススタジオ

探索はその土曜のうちに、カボ・ロホの家のパティオで始まった。夕暮れのなか、モンテ・グランデが緑から青へ、そして紫へと移ろっていた。私はiPadに、いちばん簡単な一文を打ち込んだ。『プエルトリコでタンゴを習える場所』

ミラマールのアーサー・マレーは、七回の入門パッケージを用意していた。その日の午後のうちに申し込んだ。最初のレッスンは月曜の夜、カボ・ロホから車で二時間。誰かが私の背中に手を置くより前に、一日で四時間の道のりだった。

カリビアン・タワーズの一階。本物の木の床、鏡、その週の予定を書いたホワイトボード、そしてカリブの熱気を外へ押し出すほど強い冷房。タンゴの純粋主義者のあいだでは、フランチャイズのスタジオを悪く言うのが流行っている。私はそうしなかった。そのときも、その後も。あの床は、看板どおりのものを正確に売っていた。時間割と、鏡と、決まった時刻に私の形を整えるために雇われた女性たちの交代制と、初心者がよそ者扱いされない場所を。

売ることができなかったのは、肝心のものそのものだった。教えていたのはアメリカ式の語彙、ブロックのように組み立てられたフィギュアだった。心臓が欠けていた。もっとも当時の私は、その欠落に気づける

ほどのことを、まだ何も知らなかったのだが。

その夜は五二号線を通って帰った。島の暗い背骨だ。ヘッドライトが撫でたカーブは、私がようやく近くに越すまで、週に三晩、四晩と、同じようにライトをとらえることになる。

教えることは、別の人生の長い一時期の背骨だった。生き延びることが不可能に思える場面で命を救えるよう、人を訓練すること。だが、暗闇で点滴を入れるにせよ、オーチョ・コルタードをリードするにせよ、外傷医療とアルゼンチン・タンゴは、中心となる真実をひとつ共有している。人はその場の高みに引き上げられるのではない。自分の筋肉の記憶の深さまで沈むのだ。

学びは、二つの世界でまったく同じ四段階をたどる。まず理論。ホワイトボードの上の応用解剖学、木の床の上の骨格の整列と胸郭の力学。次に実演。肋骨のあいだの正確な角度を示す、無言の針減圧。言葉なしで踊られるオーチョ・コルタード。内側の力学が見えるほど胴は静かで、完璧な遂行、雑音なし。それから、指導つきの反復。理論が体に入る段階だ。歩行の五十回目の反復とは、ただ、神経系がバランスを緊急事態として扱うのをやめる地点にすぎない。そして最後に、現場での遂行。満員のミロンガを前にした、実弾のフロア。その場所で理論は消え、足にまで届いたものだけが残る。

レッスンは記録として仕舞われた。五十分が終わったとき、残っていた熱は、自分に何がどれだけ欠けているかを正確に見せつけられたばかりの男に特有の飢えだった。それを今すぐ、サンフアンのどのスタジオが運べるよりもはるかに急な勾配で、手に入れたいという飢え。

フロアの端で、ミゲル・アセベドが追いついてきた。空っぽの励ましではなく、情報だけをくれた。フィデル・ゲレーロとブレンダ・ロサスが主催するイサベラのタンゴ・フェスティバル。そして、ある女性。その名は、ほとんどついでのように口にされただけだった。

イサベラのフェスティバル、タンゴの場所やイベントを調べていくうちに、連絡先の一覧が手に入り、それがマヌエル・マルティネスへとつながった。慎重で、急がない人。ワシントンD.C.のタンゴ・シーンでDJ兼講師として数十年を過ごし、プエルトリコに戻っていた。その一本の電話が、島での一年すべての蝶番になった。マヌエルは生きた版を教えてくれた。どの夜、どのサロン、どの扉、そしてどのクラスが通う価値があるか。

マヌエルの推薦で、タンゴのプライベートなWhatsAppグループに加えてもらった。小さな島は、こうやって自分たちの踊りを配る。正式な機関ではなく、電話で。中にいればうまく機能するが、外にいれば壁だ。生のミロンガから二ブロックのところに立っていた観光客は誰もが、この島にタンゴはないと信じて帰っていった。何かはあった。なかったのは、それを見つけるための公の道だった。

その不在こそが問題のすべてで、その解決をつくることが答えになった。いまサンフアンのどこでタンゴを探しても、TangoPulsusがあなたを連れていく。

島の床は、ひとつずつ地図に書き込まれていった。カサ・ドミニカーナでシャロン・マルドナードが開くタンゴリコ。ラ・ゴイコの、きちんと弾むスプリング床の上で行われるゴンサロ・アンドレの土曜クラス。

ミゲル・アセベドの月曜のプラクティロンガ。グアイナボでのガブリエル・フスカルドのグループレッスン。そして、マリア・クリスティーナ・ファルコンの屋外プラクティカ。

そして、私は払った。ダンスシューズ二足、各百五十ドル。ラ・ゴイコの土曜を八回続けて予約。ミゲルを週二回個人契約し、リリアムを、のちにはフランシスカを連れてきてもらって、一分一分を本物のパートナーと過ごせるようにした。それを、マリア・クリスティーナとの途切れないプライベートレッスンが支えた。

その一年でいちばん賢明だったのは、パートナーがいることにこだわったことだ。講師とだけ一時間踊れば、講師の体を学ぶ。講師の注意深い目の下でパートナーと一時間踊れば、隠れる場所はどこにもない。講師たちはみな優れていた。それこそが、問題を見えにくくしていた。

うまくいっていなかった。

通うのは簡単だった。実行するのは別のことだった。フィギュアを分解し、部分に名前をつけ、冷えた状態で練習する。そのどれも定着しなかった。音楽が始まり、本当に女性を腕に抱いた瞬間、浮かび上がってくるのは、頭にしまった基本ステップの二つか三つだけだった。本物の踊りは、まだ手の届かないところにあった。薄暗いサロンでその言葉がもつ意味においては。見知らぬ人の肋骨を手の下に感じ、一九四四年の楽団がいつ動くべきかを告げてくれる、という意味においては。

診断にはほぼ一年かかった。そして、それは誰のせいでもなかった。どの講師も見事だったが、それぞれが別の方言を教えていた。ある人の語彙、別の人の姿勢、三人目のタイミング、四人目のフロアの使い方。

そのすべてが、一時間ずつばらばらの断片として私の体に届いた。週に二、三回借りる一時間では、基礎を打ち直すことはできない。すでにあるものを飾ることしかできない。午後九時に返さなければならないサロンに、基礎のコンクリートは流し込めない。

判定は、かつては安定させられない症例のためにとっておいた、乾いた正確さで書き記された。『サンファンのタンゴ・シーンは効果的に教えていない。頭打ちだ。現地のどんな治療でも救えない。より高次の医療施設への搬送が必要』

そのとき、自分が不公平だったことに気づいた。サンファンはもともと目的地ではなかった。カボ・ロホ以来、計画はずっとアルゼンチンだった。プエルトリコは私にタンゴを教えるためにあったのではない。タンゴを教えてもらえるよう、私を準備するためにあったのだ。サン・テルモで私を迎える人が、最初の一文からではなく、二番目の一文から始められるように。

そして、その一年には、言葉にできないもうひとつの真実があった。私は、すべてを踊りに捧げた床へと手を伸ばしていたのだ。借りものではない。共有でもない。タンゴのために、意図して、そしてそれ以外の何のためでもなく造られた床へ。

正しい問いで測れば、島は、買ったものを正確に渡してくれた。ぎこちなくとも保たれた抱擁。まだ動きに翻訳できなくとも、聴きとれたリズム。まあまあの歩行。そのころにはもう、カベセオの意味もわかっていた。言葉も、いくつかの楽団の名前も、流れを壊さずにロンダに入る方法も。

基本。それがサンフアンのくれたものだ。そして基本は小さなものではない。残りのすべてがしまわれている場所の扉を、くぐらせてくれる切符なのだ。

残りは、それが住んでいる場所まで、探しにいかなければならなかった。

# ミロンガのテーブル

二〇二五年八月―ラ・ゴイコ、ロイサ通り

それは学校ではなく、ひとつのテーブルから始まった。

島のタンゴに入って数週間というころ、ミロンガでひとつのタンダを座って見送っていると、まだ知らない女性が私のテーブルに腰を下ろした。アダ・ロサ。黒い瞳で、急がず、毎曲フロアに出る必要もなくフロアのまわりで人生を過ごしてきた人に特有の落ち着きがあった。彼女は教えることについて、忍耐について、そしてロイサ通りにある、本物の冷房のきいた床について話した。あの島では、それは小さな奇跡だった。

話の途中で、アダは私のほうを向いた。推薦しようとしたわけでもないのに推薦になってしまう、あの調子で。「ゴンサロのレッスンを受けるといいわ」と、あっさり言った。「私の夫。彼はフィギュアはくれない。その下にある文をくれるの」

それがどういう意味なのか、まだわからなかった。それでも名前を書き留めた。理解する前に書き留めておく価値のある文というものがあるからだ。

翌朝ゴンサロに電話すると、彼は私の急ぎぶりにも動じず、ひとつの曜日を指定した。

ゴンサロが話したのは、せいぜい十分ほどだった。歩行について。檻ではなく会話としての抱擁について。引っぱるのではなく、提案する男について。ステップの話は一度もしなかった。

ゴンサロはいつも急がなかった。本質的なことは表面に置いておき、深く掘り下げるのは、男に本当に理解してほしいただひとつのことについてだけだった。歩くための動きを、どう始めるか。ゴンサロはひとりの体を教えるのではなかった。二人のあいだで起きていることを見て、そこを直した。

「フィギュアがほしいんだろう。わかってる」最初のレッスン、最初の十分で、ゴンサロは言った。「今日はなしだ。リードする者は提案する。君は引っぱらない。決して引っぱるな、ウォルター」

彼は開いた手のひらを上げ、空中に留めた。天気が変わるのを待つ男のように、辛抱強く。

「空間を開き、誘い、そして待つ。彼女が来れば、すばらしい。来なければ、引きずらない。待つか、別のことを提案する。引っぱる男は、相手の女性に、君がひとりで来てくれるとは信じていない、と言っているんだ」

「もし、ずっと来なかったら?」

「それでも君は踊ったことになる」とゴンサロは言った。「そして、どちらにも恥をかかせなかった」

彼は私の右手をパートナーの背中に置き、一センチだけ、それ以上は動かさずに直した。

「間（ま）だ。間は空っぽじゃない。間は、彼女が決める場所だ。彼女に間をあげなさい」

来る土曜も来る土曜も、私たちはダンスのラインを歩いた。ゴンサロはそのまわりを歩き、口数は少なく、観察するよりもさらに少なくしか直さなかった。

＊

その年、別の床で、私は彼女と踊っていた。正確で、優雅で、寸分たがわず、そして完全に控えめだった。のちに私は長いあいだ記憶を探したが、彼女の踊りのなかに笑いの痕跡はひとつも見つからなかった。彼女は閉ざした、非の打ちどころのない顔で踊った。本当に何かを求めてくるほとんどどんな場所にも、彼女が持っていくのと同じ顔で。

「今日は静かだね」と、タンダの合間に一度言った。

「お聞きしたいことがあるんです」いつもそうだった。実務的で、自分の人生の機械仕掛けを私に預けながら、残りは、決して見せない場所に鍵をかけてしまっておく。どの決断をすべきか。自分を傷つけた人に、どんなメッセージを返すべきか。ミロンガで、どのテーブルを予約すべきか。

「そして私は、いつも彼女のためにそこにいた」と、一年後、別の国で、サン・テルモのマテを手に、私はメアリーに言うことになる。「いつもね」

彼女はそのときうなずき、何でもそうしてきたように答えを仕舞い込み、同じ距離を置いた落ち着きで、抱擁へと戻っていった。

その年も何か月か過ぎたころ、彼女はあることを口にした。私がそれを認めるのに、丸一年かかった言葉だ。

「あなたは私を整理しているんです」と、彼女は落ち着いた声で言った。責めるのではなく、ただ勘定を合わせるように。「助言も。決断も。予約も。あなたが決めて、それから決めたことを私に伝えて、それを、私の世話をすると呼んでいる」

冗談にしようと口を開き、やめた。たぶん彼女は正しかった。人生でも踊りでも、私は守るという口実で一歩一歩を指図し、その指図を愛と呼んでいたのだ。

ゴンサロは何週間も前に、自分の床で、もっと少ない言葉で同じことを言っていた。決して引っぱるな、ウォルター。

彼女のほうがうまく言った。私はその言葉を、清算しないまま一年間持ち歩くことになる。サンフアンを通り、最後のタンダを通り、海を越えて、もっと冷えたサロンまで。それをどう返せばいいのか、ついにわかるまで。

# 互恵について

二〇二五〜二〇二六年 — コンダード、サンフアン、プエルトリコ

講師のマリア・クリスティーナ・ファルコンは、サンフアンの公共の場所でタンゴのプラクティカを開いている。私が出会ったころは、ステラ・マリス教会の前のアントニア・キニョネス広場で、のちに、アントニオズというレストランの向かいのコンダード小広場に移った。週に一晩、一時間半の指導と練習。

初めて行ったとき、音響は小さなスピーカー一台と、Bluetoothでつないだ電話と、声を張り上げる講師だった。私はそれを、よくしなければと感じた。

それ以来、毎回のプラクティカに、ワイヤレスのプロ用スピーカー二台と、耳にかけるタイプのマイクを二本持っていった。彼女の両手が空いて、グループに話しかけながら、生徒の肋骨に指を二本添えられるように。

誰も来ないうちに設置し、全員が帰ってから片づけた。毎週、何か月も。誰に頼まれたわけでもない。

「このプラクティカがいっぱいになるのが見えるよ」と、広場が声を見つけはじめたその最初の夜、私は彼女に言った。「そうなったとき、みんなに君の声が届く」

あのプラクティカこそ、私たちが本当に分かち合っていた領域だった。夕食は機会にすぎず、ミロンガは一種の公演だった。週に一時間半、コンダードのタイルの上で、同じ八人か十人、同じ修正、同じ増幅され

た声。

しばしば、誰かがプラクティカの端で立ち止まった。見知らぬ人がためらうように、ためらいながら。私たちには無言の決まりがあった。中に招き入れ、いくつかステップを教え、できると感じさせ、また来るよう誘うこと。

ミゲル・アセベドは毎月最終土曜にアーサー・マレーでミロンガを開いていて、そこではワインがプラスチックのコップで出されていた。その夜、私は何も言わなかった。翌週の月曜、彼のプラクティロンガで、ワイングラス二十六脚の箱を贈った。

彼はそれを三回のミロンガで使った。それから箱はクローゼットに戻った。土曜の夜の二十六脚のグラスは、日曜の朝に洗う二十六脚のグラスだからだ。月曜だけは出しつづけた。人数が少なく、帰る前にそれぞれが自分のグラスを洗う日だけは。

男は、ひとつのサロンに、そのサロンが維持できる習慣以上の設備を与えてしまうことがある。私がひとりの女性にもまったく同じことをしていたと気づくまでには、もう一年と、もうひとつの国が必要だった。

# 拒絶

二〇二五年 ― サンファン、プエルトリコ

温かな光、バーのグラスの触れ合う音、たけなわのミロンガ。バーのそばに、女性たちのグループがいた。私たち二人を知っている人たちだ。

私はiPadを掲げてフロアを撮っていた。それを下ろし、彼女に手を差し出した。

「踊ろう」

「いやです」和らげもせず。理由もなく。彼女はわずかに体を回し、バーのほうへ戻った。

女性たちは、全員が友人だったが、驚いた。そのなかにいた年配の婦人がグラスを置いた。「お嬢さん」婦人の声が、きっぱりと切り込んだ。「この人はあなたを踊りに誘ったのよ。あなたは彼と踊るの！」

「踊りたくありません」

「どうして？　理由を言ってあげなさい」

「言う必要はありません」声を荒げはしなかった。その必要がなかった。「いやです」

婦人は長いあいだ彼女を見つめ、それから私を見た。バーの女性たち全員が、婦人と一緒に見ていた。拒絶は、そのフロアにいるすべての女性の前で記録された。

「そう」婦人はふたたびグラスを持ち上げた。彼女から目を離さずに。「なら、あなたたち二人のあいだには入らないわ」判決のように、やさしさのように、小さな扉が閉まるように、そのすべてを一度に込めて言った。「でもね、ただで教えてあげる。二度誘う男は、永遠には誘わないものよ」

私はテーブルのほうへ向き直った。二度目は誘わなかった。それきり、二度と。

# この続きは

いま、『抱擁 ― タンゴの弟子』の序と第一部を読み終えたところです。

本書の全編は、ウォルターをプエルトリコからブエノスアイレスのマリポシータ・デ・サン・テルモへと運びます。抱擁と、歩行と、ミロンガのひと冬。そして踊りが彼に愛について教えること。

完全版の電子書籍（EPUB・PDF）：tangopulsus.com

Walter@TangoPulsus.com